
灯火妖怪伝記

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯火妖怪伝記

【ZPDF】

Z1605D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

この世には、まだ世に伝えられていない妖怪達がいる……………これから話すお話は、その中のほんの一欠けら。

泥雀

昔、とある農村で、大雨が降った。農作物に影響が出るほどでは無かつたが、村の人々は雨のおかげで億劫な朝を迎えていた。雨の量が量だつただけに、村にはそこら中に、大きな水溜りが出来ていた。おかげで土はぬかるみ、人々は歩くのに難儀した。だが子ども達にそんな大人の苦労など関係なく、水や泥遊びが好きな少年少女達は、水溜りで暴れまわった。

そして、いつも着物を汚し、村の母親達は、皆頭を抱えて貧血でも起こしたような顔になつた。

さらに村ではぐずついた天氣が続いた。同時にその頃、村で神隠しが起こり始めた。

突然、人が村から一人ずつ消えるのである。それは子ども、女、老人、武士、役人、家畜と、どんな年齢も、どんな生き物も、そしてどんな身分でも関係はなかつた。

その原因を探るため、一人の侍が、事件を調べることにした。

彼は大層真面目な人物で、村人からも慕われていた。弱者に味方するという精神が、人々の心を掴んでいるのだろう。

だが、本人は別に考えて守っているわけではなく、単純に自分が正しいと思ったからやる、といったような、そんな自分の性格に無自覚な、心優しい男だつた。

そんな彼が、誰に言われたわけでもなく、個人的にこの神隠しに興味が沸かせたのは、当然のことだとと言えよう。

彼が、隣村との道を繋ぐ際に通る竹やぶに差し掛かつた時のことだつた。

ふと前の方で、バシャバシャと音がした。竹やぶの中にいて、とてもそれは不自然な音で、何事かと思って彼は走った。

走つていってみると、田の前にあつた大きな水溜りで、小鳥が一羽溺れていた。

だが、その小鳥は丁度力尽きたところだつた。哀れなことに、その小鳥は侍の助けを待つことなく、水溜りの中に沈んでいった。

可哀想に、大雨続きの後で、さらに陽が届かないものだから、こんなところに水溜りが出来っぱなしになつていたのだろう。その小鳥が非常に不憫に思えた侍は、せめて泥水の中から救つて、どこかに埋めて葬つてやろうと考えた。

侍は早速腕をまくつて、水溜りに手を差し伸ばした。

一瞬であつた。そこにさつきまでいたはずの侍は、一瞬で水溜りの前から姿を消してしまつた。

それと同時に、水溜りの中から、何かが外を覗く様に、じっくりと何かが出てきた。

やがてその何かは「が形を形成していき、最終的には水浸しの『雀』となつた。

水浸しの雀は、少し身体を振るつたあとで、静かに空へと飛び去つていつた。

数日後、竹やぶの中で、まるで山のように積まれた村の人間達が発見された。全員窒息死だつた。

家族や友人達などが悲しみに暮れながらも全ての死体をどかしたその下には、水溜りが静かに波紋を作つていた。

妖仙狐

妖仙狐は、山の奥不覚に住む、狐の妖怪である。

仙という字が示している通り、いわゆる仙人のような奇怪で高等な術が使えるのが特徴だ。

その力を駆使して、彼は人間の世界を攻めることも出来たが、それをしなかつた。

ただ山奥に潜み、たまに迷い込んできた人間を脅かしたうえで家に帰すのを趣味としていた。

だが、それも何度もやつていれば、飽きてしまつのも当然のこと。妖怪も感性は生き物と同じである。

静かな生活に飽きた彼は、谷の下にある山の村へと足を運び、村に隠れ住むようになった。

すると彼は、神隠しをして、数日してから何事も無かつたように帰してみたり、人を仮死状態にして弄んだり、イタズラまがいのことをして始めた。

つまり、人間をおもちゃの様にして、毎日遊ぶようになったのだ。人間達は、大層迷惑した。

本当に死んだり、怪我をしたり、病気などになることは結果的に無かつたとはいえ……こんなことでは安心して暮らせないのは当たり前のこことだ。

そんな困った顔を見るのが、妖仙狐の楽しみとなり、それからも彼のイタズラは、日増しに度を超えていった。

いよいよ、村人達が精神的にもクタクタになつてきただ頃、一人の坊主が村を訪れた。

坊主は、話を聞くや否や、妖仙狐が住んでいる場所を、妖力を察知して見つけ出し、話をつけにいった。

妖仙狐は、それほど短気な妖怪ではなかつた。しかし自尊心は高く、傲慢とは行かないまでも、自分勝手で気まぐれなところがある性格でもあつた。

話が平行線を辿るようになつた頃、ついに妖仙狐は重い腰をあげ、「話すのが面倒になつた」と語るや否や、坊主に襲い掛かつた。

だが、その坊主は只者ではなかつた。高い靈力を持つた彼は、大妖怪と呼べるほどの妖力を持つた彼と、凄まじいを繰り広げた。戦いは一日では終わらなかつた。二日……三日と長期化していった。互いの力が五分だったのである。

妖力において、妖仙狐は坊主を勝つていた。しかし、相性で言えば坊主と妖怪どちらに分があるかは、一目瞭然だらう。

そして長きにわたる戦いの末、いよいよ坊主の体力が尽きてきた。一方で妖仙狐は妖怪だけあり、まだ余裕を持っていた。ついに死を悟つた坊主は、タダでは死なぬと、妖仙狐へと飛びついた。そして、ありつたけの御札を妖仙狐に貼り付けた。貼り付けられた妖仙狐は身動きが取れなくなるも、彼とて仙力を持つ妖怪、御札ぐらいで封じられるようなものではない。しかし、坊主は一時的に敵の動きを封じているうちに、全靈力を使い、ある術の準備をしていたのである。妖仙狐が、御札を破つたその時、坊主が命と引き換えに放つた究極の術は、発動した。

辺りがとてつもない爆風の煙に覆われ、その中では妖仙狐が呻く声が聞こえた。

呻き声が止み、煙が晴れた時、妖仙狐の姿が見えてきた。

少し身体の小さくなつてしまつた彼は、ふと自分の異変に気づいた。仙力が非常に弱まつていたのである。

これでは自由自在に人間を弄ぶことも出来ない。そうわかつた彼は

村から去り、今まで住んでいた山に籠るよになつた。

普通の化け狐のようにしか人間を化かすことが出来なくなつた彼は、以降自分の住処で、ぐうたら寝るだけの、ものぐさ妖怪になつてしまつたという。

妖仙狐（後書き）

元々設定してある本編怪社の設定とは、大分逸話が異なります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1605d/>

灯火妖怪伝記

2010年10月28日04時40分発行